



豊かな自然の中で人々が慈しみ育てた島々の文化は、独自性が強い。首里王府が支配した長き時代には島々の交流が極めて少なく、厳しい島社会を強いられてきたと考えられる。厳しい島社会で農林水産業を営んできた先人達は日々の苦しい生活の中にあっても民俗芸能、まつり等を育み、そのものを生きる力、心の支えにしてきた。今、物があふれ金さえ出せば何でも得られる時代にも、その農林水産業に関するまつりが伝承、継承されているのは、八重山諸島が極だっている。豊年祭、節まつり、種子取祭、結願祭、ハーリーは、島民あけてのお祭りであり、近年では、それらを見にやってくる観光客も増えてきており、独特の祭り体系と、神への感謝の表現には感心させられる。このような環境下で育った八重山の人々々は、伝統行事等にも労を惜しまない。そのため文化面、芸能面でも多彩な人材を生み出している。



【ムシャーマー】

最大のお祭りが「ムシャーマー」と呼ばれる旧盆中(旧暦7月14日)に行われる行事で、先祖霊をなくさめると同時に豊年祈願を行う。芸能の祭典である。島では3つのグループに分かれ、豊年と幸せを招くというミレク神を先頭にミチサネーと呼ばれる仮装行列を行いながら、公民館に集合する。その後公民館では棒術、踊り、狂言などを披露し、夕方また帰っていく。(竹富町波照間島)



【節まつり】

農作物の収穫を感謝して、来年の豊作を祈願する。ミレク行列、棒術、船ごぎ競争などがあり、西表のシバは国の重要無形文化財に指定されている。旧暦8・9月の間に行われる。(竹富町)

【ハーリー(海神祭)】



爬龍船は毎年旧暦の5月4日に豊漁を祈願して行う海人最大のまつり。白保や竹富町黒島、西表島白浜、小浜島の細崎、与那国町久部良でも行われている。(石垣市)

八重山をもっと  
エンジョイしよう



【アンガマ】

旧盆の三晩、後世(グソー)からの使者であるというウシユマイ(おじいちゃん)とニミ(おばあちゃん)のアンガマの仮面つけた若者と女装したファーマー(子孫)の一行が、各家々をまわりトウチの効いた会話を歌、踊りて祖先供養をする。石垣島の盆には欠かせない風物詩。(石垣市)



【海人文化】

昔の八重山の漁業は、珊瑚礁の周辺が中心だった。明治期になって糸満からの移住民によるカツオ漁が営まれることによって発展していった。海人のサバニ漁法は、先人の知恵として今の時代にも活かされている。昨年から海人によるサバニクルーズも行われている。石垣市立八重山博物館へ行けば海人文化が学習できる。(石垣市)

歴史

【農耕文化】

八重山の農業は、人頭税である米を中心に1年間のサイクルが刻まれ、農作業に使われる道具も米づくりに関するものが多い。弁当入れのアンツクは、現在、民芸品として制作、販売されている。石垣市立八重山博物館へ行けば農耕文化が学習できる。(石垣市)

【ブーリイ(豊年祭)】

八重山では、石垣市登野城・大川・石垣・新川の四ヶ字や各地で毎年旧暦の6月に豊年祭が行われており、各御嶽で豊年祈願をする。旗頭、奉納舞踊、綱引きなど各地域ごとに特色がある。(石垣市)



【結願祭】

旧暦の8月に行われる。祈願の総まとめ的なまつりで多彩な芸能が奉納される。竹富町小浜の結願祭は国選定の重要無形文化財。(竹富町)

【種子取祭】

竹富島の種子取祭は毎年旧暦の9月から10月にかけて10日間にわたって行われ、この間に舞踊狂言など数多くの芸能が奉納される。祭りを通して農作物の豊作を祈り、神への感謝の気持ちを表現する。(竹富町)



八重山の技、魅力。

紺碧の海の彼方には、神の国ニライカナイがあるという。詩の国、歌の島、踊りの里のルーツは、時の流れに刻み込まれた先人の生きる力、心の支え、何かを得たいと願う心の持ち主なら、きつと伝わるはず。